

「孫武曰く、激水の疾きこと、石を漂わすに至るものは勢なり。鷺鳥の疾きこと、毀折に至るものは節なり。故に善く戦う者は其の勢險に、其の節短し（『孫子』兵勢第五の文）。」そうであれば戦陣の法を習い、進退奇変の術を学び得たといえども、かつ軍勢の節（静から動への転換）を作為すべきことを見知ることができない者は、それを偶然としか捉えられずに時機を失することが多い。状況を急変させて、にわかには勝敗を決定づける決め手とは、敵の立場からその機を推察し、両軍の時勢を知ることにはならない。このことから考えると、勢と気とは本々は一つのものであり、分ければ二つになるのである。例えば軽い船が走ると、これに従って水面に風のようにさざなみが起こるようなものである。

全ての物に初めがあり、中間があり、終りがある。長短遅速それぞれに勢の発する所には当然のこととして時節があることを究めて、これを短く用いるときは、すなわち柔らかな水でさえも木石を動かし、細やかな羽毛でさえも速ければ堅いものを切るような巧妙が生じることになる。無形から無形に至ることこそが兵勢の用法であるから、戦うときは常に風の如く物に対して迹だけが残る。これを「仰風の権」とはよく言ったものである。勢はあたかも浸透するかのように気を増大させ、そして短兵急に攻め立て、攻め立てる。喩えば、節刀を執って竹を破るがごとくにせよ。敵がこれにより破れ、混乱するに及んでは、又、燃える火のような勢をなせ。（混乱した）敵が敵を攻めるように仕向けるのは、さらに勢の余術だからである。このように、我の勢を十分に知っている者は、「縮」の状態が尽きないことは湖に映る月のようであり、弩（ど・おおゆみ）を張るようでもある。あらゆる戦術の要は、勢にあるのであって人にあるのではない。それゆえに良将は、しっかりと人を選んで勢に任ずると云われるのである。